

に見ることが大切だとおっしゃって、図書館に紹介状を何通も書いてくださり、そのおかげで貴重な文献をたくさん見ることができた。授業が休みの時期にヨーロッパ各地の図書館を訪れ、羊皮紙に書かれた十二〜十五世紀の聖歌や多声音楽の楽譜をひたすら勉強した。そのとき経験した、本物の史料に触れる感動が、いまの私の研究活動の支えとなっている。

### 👉 研究の最先端は対話のなかに

留学中、先生が参加する欧米の学会にはすべて出席した。学会で研究者の顔や声や話し方を覚え、その人となりや思想を知ること、その研究者が書いた著書や論文への理解が深まるといわれたからだ。実際に多くの学会に参加し、研究者たちと対話することの大切さを痛感した。それまでは、海外で刊行された最新の本や論文こそが研究の最先端だと思っていたが、学会の討論のなかで、まさにそれが紡ぎ出されてくる様を目の当たりにし、大きな衝撃を受けた。研究者同士が対面して議論することの大切さを学び得たのは、大きな成果であった。

### 👉 マンチェスターの風景

当時のマンチェスターは、大学が五つほどある学生のまちだった。なかでもマンチェス

ター大学は、ヨーロッパで最も多くの留学生を受け入れる大学の一つだった。まちを歩くとさまざまなアクセントの英語や世界中の言語が耳に飛び込んでくる。多様な文化圏、学問領域、宗教的背景の人々との交流により、自分の世界が大きく広がるのを感じた。

学生寮で生活を共にした英国人学生の行動様式からは、相手を大人として尊重する態度や、人との間に快適な距離を保つ工夫など、人として多くのことを学んだ。大学の教授陣は、食事や休憩に十分な時間を取りながら、精力的に授業や研究をこなす。パッと集まってサッと会議を終わらせスッと帰宅するといふ、メリハリのある時間の使い方をしていた。そうした時間の流れが心地良かった。

### 👉 帰国後から現在まで

帰国後は東京藝術大学に復学し、留学の成果を国内外の学会で発表しつつ十五世紀初期のミサ曲に関する論文をまとめ、博士号を取得した。助手を務めた後、東京藝術大学、愛知県立芸術大学、京都市立芸術大学で非常勤講師を務めてきた。専門科目の授業では、西洋芸術音楽がキリスト教文化と深いかわりを持ちつつ発展してきたことについて、視聴覚資料や貴重楽譜の複製版を活用し学生に伝えている。昨年二月にはNHK・RFMの番組でグレゴリオ聖歌の魅力についてお話しさせ

ていただいた。今年七月には、博士論文で扱った中世末期の音楽家ヨハネス・チコニアの没後六〇〇年を記念して開催される演奏会に企画協力する予定である。

現在は、東京藝術大学の特別研究員として、芸術分野における博士学位のあり方に関する研究調査を行っている。私の担当は、海外の高等音楽教育機関における博士プログラムの内容や指導体制、学位授与プロセス、機関同士の連携等について動向を調査することである。例えば、英国には九校の音楽院と四六校の総合大学に音楽専攻の博士課程がある。これらの機関がおのおの独自の歴史や伝統を守りつつも互いに連携し、そのなかで少数精鋭の学生を大学の枠を超えて育成する。その連携は英国内にとどまらず、世界各国の研究・教育機関と結びつき、国境や学問領域を超えたネットワークを形成している。留学後、その連携の必要性を実感した私は、予算削減や少子化等の影響で存続が危うい日本の芸術系大学に、この連携システムを採用できないかと考え、諸外国の事例をもとにさまざまな角度からの調査・分析を行いつつ、具体的な方策を探っている。

留学の機会を与えてくださった国際文化教育交流財団と、常に支えてくれた家族や友人、先生方への感謝の気持ちを胸に、これからも着実に教育研究活動に取り組んでいきたい。

# 対話のなかに研究の最先端をみる

東京藝術大学大学院音楽研究科  
リサーチセンター特別研究員

遠藤衣穂

えんどう きぬほ



国際文化交流財団奨学生（一九九七年度、九九年マンチェスター大学大学院音楽研究科修士課程修了。東京藝術大学大学院音楽研究科博士課程修了。博士（音楽学）。東京藝術大学音楽学部助手を経て、二〇〇八年より現職。専門は中世・ルネサンス時代のキリスト教文化と音楽。

## 「ウエルカム・トゥ・マンチェスター！」

公衆電話の耳元から聞こえてきたのは、デイヴィッド・ファロウズ先生の温かい言葉だった。一九九七年の夏、マンチェスターに着してすぐに、指導教員としてお世話になる先生に電話をした。その後の会話は覚えていないが、先生の第一声を聞いたときの感激は忘れることができない。

東京藝術大学で修士論文を執筆していると、先生に先生の著書を読み、心をひかれた。斬新ではつらつとした仮説を親しみやすい文体で繰り返し広げるその著者に、いつか会って話をし

てみたいと強く感じていた。博士課程に進学したものの、専門とする十五世紀のキリスト教典礼音楽に関する資料が国内では不足しており、研究に行き詰まっていたある日、学内の掲示板に貼られた国際文化交流財団の奨学生募集広告を目にした。真っ先に頭に浮かんだのは、十五世紀音楽研究の第一人者であるファロウズ先生のもので学ぶことだった。幸運にも奨学生として採用され、マンチェスター大学からも入学の許可が下り、期待に胸を膨らませて英国へと旅立った。

## 大学院での日々

マンチェスター大学大学院音楽研究科は、

●経団連国際文化交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。海外の大学・大学院に留学する日本人学生や日本の大学に在籍する外国人留学生に対する奨学金の支給を通じて、わが国の学術研究や世界経済の発展に寄与するとともに、国際社会に貢献する人材を育成することを目的に活動している。

学位の質を落とさないように、英国において教育を受けた経験のない欧米圏外の留学生に対し、修士課程から学ぶことと、通常一年で修了する課程を二年かけて学ぶことを義務付けていた。その規則に従い、修士課程に二年間在籍し、演習と実習からなる四つの授業を履修した後、論文を提出して音楽学の修士号を取得した。大学院の授業は、少人数でのディスカッションと実践的な課題をこなす内容が中心であった。一年目の同級生は、英国人三人とイタリア人留学生一人。課題の調査のため、彼らと日帰りでロンドンの大英図書館を訪ね、机を並べ勉強したことが懐かしい。

授業の一つは、ファロウズ先生による研究の個人指導で、毎週二時間にわたり厳しい指導を受けた。毎回異なるテーマで二〇〇〇語の小論文を書くことを課せられ、学術的な英語の表現について丁寧にご指導をいただいた。先生と議論を重ねるうちに研究の焦点が定まり、修士論文を完成させることができた。

先生は、一次史料（手書きの楽譜）を実際